外の支配者の命懸けのサバイバル

脳好き人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
外の支配者の命懸けのサバイバル

【Ｎコード】
Ｎ０１２４Ｚ

【作者名】
脳好き人間

【あらすじ】
無人島に五人の代表者が集まり、国を外から支配する権利を懸けて殺し合いを始める。代表者は命懸けで殺し合い、観察者は命懸けで観察する。命懸けの話。

戦いの始まり

年に一度、この国ではトップを決める争いがある。

トップとは言っても、総理のことではない。彼等は目立つことを良しとしないのだ。

『外』と名のつく者達、彼等は数百年前から、この国を裏から操ってきた。

一外(いちがい)、白外(はくがい)、札外(さつがい)、武外(むがい)、吉外(きちがい)、の五つの家の者が一人かずづつここへやってくる。

ここで殺し合いをし、生き残った者がその年、国の支配者となる。

一般人には関係ないように見えるが、その実、相当関係しているのだ。

昔、札外の者が勝ち残ったとき、この国では通り魔、と呼ばれる者が多く出た。

白外が生き残った時にはいじめが大量に起こり、吉外のときは多くの者が発狂した。

いや、一概には言えないけれど。個体差もあるし。

だが、彼等のほとんどが、自分が一番正しいと思っているのだ。

ああ、何故先程の例に一外と武外の名が無いか、かというと。

答えは簡単。彼等は、一度も勝利したことがないのだ。

武外は、無害だ。人を傷付けることが出来ない。一外は、ただの変人だ。戦いには向いていない。

まあ、だからと言って今回も負ける、とは限らないが。

今回の一外は一族の中でも相当の変わり者だ。

どう場を掻き乱してくれるか、全く予想がつかない。

おっと、もう時間のようだ。

それでは皆さん、さようなら。次会う時は、この戦いの終わった後だ。

一同対話する

おっと、ここからは私が語り手を引き継がせて頂きます。名は、枠外(わくがい)と申します。

丁度、皆さんも集まられたようですし。

「ふーん、思ってたより簡素な所だね」

一外の代表が周囲を見回しながら言う。しかし、それに応える者はいない。今から殺し合う関係なのだから、無駄な会話をしたくないのだろう。

「……シカト、か。うう、涙が、出てくるよ」

一外は涙を拭うフリをしながら言う。すると、一人の少女が近づいて来た。武外の代表だ。

「あ、あの、大丈夫ですか？ハンカチ、使ってください」

武外は一外にハンカチを差し出した。今から殺し合う相手に親切

にしたところで、意味などないと思うのだが。

「ありがとう。君は優しいんだね。まあ、初対面だし一概には言えないけど」

「優しくなんてないですよ。私がそのハンカチを持っていたところで、何の役にも立ちませんし」

「何の役にも立ちませんし、だと。何故だ？」

「私、暴力嫌いですから、この戦いで誰かを攻撃することはありません」

「ふむ、答えになっていないな」

「だから、私がハンカチを持ってたところで、すぐ殺されちゃうから意味が……」

「喋んじゃねえカス共。俺様に不快な思いをさせやがって！」

突然の罵声に一外は笑顔で、武外は驚いた顔で振り向く。そこには、白外の代表がいた。

「俺様が来たんだぞ。早く頭を下げろ。殺すぞ？」

「いやいや、僕は頭を下げると爆発する体質でね。頭を下げられないんだ」

白外の言葉に一外が応じる。

「貴様、俺様を愚弄して……」

「びゅーびゃあーどーん！」

白外の言葉を掻き消したのは、吉外の代表者だった。やはり今回の代表者も話が通じなさそうだ。

「びゃーびゃーきっく！」

「き、貴様っ！いいかげんに……」

「あらばらはき、さける！」

流石の白外も、吉外の者には敵わなかったようだ。言葉が全て奇声に掻き消されている。

白外と吉外の言葉の応酬はしばらく続いた。

それを遠巻きに眺めているのが、一外と武外、それに札外だ。

一外は微笑み、武外は怯えながら見守っている。

札外は、後ろ手にナイフを持ち、武外に近づいていく。

どうやら、戦いが始まる前に武外の代表者を殺すつもりらしい。それも恐らくは、勝負のためではなく、ただ殺したいから、だろう。札外とはそういうモノだ。

しかし困るな。これでは計画に支障がでる。だが、私は枠外、札外を止めに行くことは出来ない。

それに、札外には今まで何人もの枠外が殺されてきた。安易に近づくのは危険だ。

「おいおい、札外さん。後ろから近づくのは礼儀が……、って女性じゃないか！まさか札外から女性の代表が出るとは……」

札外がナイフを振り上げた瞬間、二人の間に割り込み、一外が喋りかけた。

「今からするのは殺し合いだ。それなのに今回は女性が二人。身体的に女の方が男よりも不利だっていうのに。まあ、一概には言えないけど」

「お前、誰だ？」

札外が一外を睨みながら問う。異常な殺気を伴って。

「僕は一外。よろしく。出来れば仲良くしてくれ」

遠くから観察している私ですら、札外の殺気に恐怖で脚が震えているというのに、一外は札外に握手を求める。

それを札外は無視し、今度は白外、吉外の元へ向かって行った。

一外はそのことに落ち込み、涙を拭うフリをする。

今度は誰も慰めてくれない。先程慰めてくれた武外は、札外の殺気に怯え、気絶してしまっていた。

まあ、そろそろ頃合いか。武外が気絶しているのは気になるが、急がないとトラブルが起こるかもしれない。主に札外と吉外が原因で。

「本年度の戦いを始めます！」

私は大声で叫ぶ。きちんと全員に聞こえるように。

早速、白外と吉外との戦いが始まる。白外はメリケンサック、吉外はスコップを武器としている。

また、一外は気絶している武外を抱え、走り去って行った。

そして、札外は私の方へ、ナイフを振りかざしながら近付いて来る。

ザクッ、と、私の心臓が刺された。ああ、死、確定だ。

私はもう長くない。また、視界が暗くなって、何も見えなくなった。

よって、最後に詳しいルール説明を。

この無人島全体が戦いの場であり、どのように戦っても構わない。

武器は、拳銃や、それに準じる物以外なら何を持ち込んでも良い。

五人の内四人が死亡した時点で、生き残った者の勝利となる。

ちなみに、戦いを監視するのは私達枠外の・・・、で・・・る。

一同対話する（後書き）

登場枠外紹介

枠外　三春（みはる）

常に冷静沈着な枠外のエース。弟を溺愛していた。
声を出すのが苦手で、特に大声を出そうとすると緊張で体が動かなくなってしまっていた。
得意料理は目玉焼き。毎朝弟の為に作り、欝陶しいな、とか思われていた。

一外と武外、協力する

すみません。前回は姉が死んでしまって。

今回は、僕が枠外として語り手をさせていただきます。とは言っても、僕は死にたくないので安全そうな人の辺りで語ります。

「おーい、起きてくれよ。武外さん！」

「……あれ、私、生きてる？」

一外が武外を起こす。記録によると、何故か一外は武外を助けようとしているらしいが。

「起きたね、よかった。あと少しで僕は自分の欲望を抑え切れなくなるところだったよ」

「え、ええっ！」

一外の言葉に武外は驚き、逃げようとする。だが一外はそれを追い掛ける。

「待った、冗談だって。いや、男は皆狼と言うし、一概には言えないけどね」

「ど、どっちなんですか！？……ってうわあ！」

武外は、不運なことに、偶然落ちていたバナナの皮を踏んでこけてしまう。結果、一外に追いつかれた。

そして、一外は倒れた武外にハンカチを渡した。記録によれば、戦いが始まる前に武外に渡されたハンカチだ。

「いやあ、実はこれを返したくてね。帰す前に死なれると困るからここに運んだわけなんだ。悪かった、かい？」

「え？あ、いえ……」

「納得してくれたかい。よかったよかった。安心してくれ、どさくさに紛れて胸を触ったりなんて決してしてないからね。決して」

「……」

一外は一瞬だけ信用を得たようだったが、一瞬で再び信用を失った。

「しかし、可愛い女の子を追うのって、結構楽しかったな。まるで、とある歌のクマさんになった気分だったよ。いや、僕はクマさんじゃないから一概には言えないけどね」

「……」

「うーん、あの快感が忘れられない。武外さん、出来ればもう一度逃げてみてはくれないかい？」

「……」

短い会話の中で、一外は凄まじいスピードで武外からの信用を失っていく。もはやこれは達人レベルだ。何の達人かは知らないが。

「……とまあ、そろそろ冗談は置いておこう。本題に入ろうじゃないか？」

「本題？」

一外が喋り続けて数分、武外が不審者を見るような目をして怯えはじめた頃、ついに真面目な話が始まった。

「正直、この戦いで僕達が生き残るのは難しい。皆、想像以上に恐ろしい武器を持ってきてたようだしね」

「武器、ですか？」

武外の顔に疑問が浮かぶ。戦いが始まったときに気絶していた為、武外は何も知らないのだ。

「うん、白外はメリケン、吉外はスコップ、札外はナイフだ」

「え、そんな恐ろしい物を持ってきてるんですか！」

「命が懸かってるからね。ところで、君は何を持ってきたんだ？」

「……これです」

武外が顔を逸らしながら答える。その手には、ハンカチがしっかりと握られていた。

「な、ハンカチだと！？」

「……すみません。そんな怖い戦いだなんて知らなくて」

「いや、大事なのはそこじゃない！」

「へ？」

「君は僕にこのハンカチを貸していたよな。自分の武器を人に貸すなんて、信じられないよ！」

「……す、すみません」

「いや、わかればよろしい」

僕には、この光景がおかしな状況に見えるが、二人にとっては普通なのだろう。

枠外としての第二の役目、ツッコミをさせていただきます。

怒るところが違うだろ！

おっと、武外が口を開いた。

「あの、質問してもよろしいでしょうか？」

「なんだい？」

「一外さんは、何を持ってきたんですか？」

「ふふ、よく聞いてくれた。……これだ！」

一外は懐からハリセンを取り出した。

「これはハリセンと言ってね。叩くと凄い音がするんだ。カッコイイだろ？」

「はい、カッコイイです」

「いや、照れるな。……後は、暑い時の為に扇子を持ってきたんだけど、意味はなかったようだ」

「ここ、かなり涼しいですしね」

くっ、僕が枠外でさえなければ、そのハリセンを奪って二人にツッコミを入れるのに……。

「でさ、武外ちゃん。僕が一番言いたいことなんだけど……」

「な、なんですか？」

さっきまでの平和な空気が、一気に緊張に包まれた。

「僕と、結婚してください！」

「え、は？な、何を、言ってるんですか！そんないきなり……」

武外が顔を赤くして混乱している。

も、もうだめだ。あのハリセンでツッコミを入れたい。でも、僕は枠外。枠の外の人間だ。それに、もしも下手な真似をして僕が枠外から外されたら、大変なことになる。今年の枠外候補は、僕と姉以外は皆変じ、個性的だから。

「おっと間違えた。僕とだね、協力しないかい？一人よりは二人の方が楽しいだろう。一概には言えないけどね」

なんだ、言い間違えか。びっくりしたな。それにしても協力か。最終的には殺し合わないといけないというのに、呑気なものだ。

普通なら、ノー、もしくは、協力したフリをして油断した相手を狙うか、だろうな。でも、この二人のことだから……。

「……はい。協力します。私を助けてもらった恩もありますし、少しでも恩返しがしたいですから」

恐らく、この言葉は本気で言っているんだろう。

「ありがとう。感謝するよ。じゃあ、早速あの山へピクニックに行こう！」

「はい！」

一外は、武外の手をとり走り出す。いきなりピクニックか。全く、このコンビは面白いな。

……しまった。枠外としたことが情けない。随分マニュアルとは違う語りをしてしまった。いつから、だ？

いや、それよりも早く語りを再開しないとな。

一外・・・は。

吉外は、スコップを振り回し、こちらに近付いてきた。そして、スコップの先が僕の肩に刺さる。

「かたかたかたかたかた。ささささったよ！」

吉外は血に染まったスコップを眺め、叫ぶ。そして、どこかに走り去って行った。

流石は姉弟、死に方まで似るんだな。まあ、姉と同じく、補足説明を。

先程の吉外のスコップには、僕が刺されるまで血が付いていなかった。つまり、白外は生きている可能性が高い。

今回は、長期戦になるのだろう。食料はどうするのか、というと。

ここでは、川や海に食用の魚が、木には木の実が、地面には野菜が、それに焼くことで食べられる動物が。つまりはサバイバルに適

した環境だ。

サバイバル、長期戦。あれ、何まで話したっけ？

すみません。血が足りないせいで頭が働かなくて。

最後に、一言謝罪を。他の枠外は、個性的な性格をしています。きちんと働いてくれないかもしれません。

……思ったより死ぬの遅いですね。じゃあ、僕の個人的な見解を言わせてもらいます。

あの変人、一外は、思いつきでピクニックに行ったように見えますが、恐らくは吉外から逃げる目的だと思います。

ピクニックに出発する直前、僕の後ろを見て苦笑い・・・した・。あ・・・。

一外と武外、協力する（後書き）

登場枠外紹介

枠外　視常（しじょう）

責任感が強く、真面目だった。姉のことはうざいと思いつつ、割と大切に思っていた。

大好物は目玉焼きだった。魚の。

枠外最後の常識人として、一生懸命頑張っていたが、あっさり、いや、じわじわと死んでしまった。

札外、殺害する

俺の子供達が死んでしまったので、今回は俺が枠外だ。よろしく。

記録によれば、札外と吉外に殺されたらしいな。情けないことだ。つーか、あの二人が死んだせいで、俺に仕事が。

とにかく、あまり語りの仕事がなさそうな、札外を中心に語る。あの娘、可愛いしな。

「……」

札外は、ただ黙々とナイフを眺めている。

はあ、早速だが疲れた。あの札外、どうやら俺も殺そうとしているみたいだ。先程からこちらをちらちら見てくる。

仕事をするのが面倒だし、殺されてやってもいいとは思うんだが、確か俺の次の枠外は妻だったような気がする。

流石の俺でも妻を危険に晒したくはない。俺は一家の大黒柱だか

らな。

「すらはかは、かたなかたな！」

おっと、吉外が来た。これで少しは面白くなりそうだ。

スコップが振り回される。その攻撃範囲のギリギリ外から、札外は様子を窺っている。

「くるまが、かれた！」

「くっ！」

スコップを避けた札外に、吉外の後ろ回し蹴りが当たる。うわ、女に暴力とは、引くわー。

しかし、吉外の手足、長いな。スコップを避けた札外に、半歩踏み込むだけで蹴りを届けている。あのスコップの長さが一メートル半くらいで、手の長さが一メートルくらい。トータル二メートル半だ。

半歩が一メートルだとしたら、足の長さは最低でも一メートル半あることになる。というか半歩で一メートルって……。

可哀相な札外だ。俺だったら絶対にあんな化け物と戦いたくないね。

あーあ、俺には女をいたぶってるのを見て喜ぶ趣味は無いし、別の奴らのところに行くとしようかな。

「……ざっくり」

俺が別の場所に行こうとした瞬間札外が呟いた。しかし声も可愛いな。この戦いが終わったら、ちょっと声をかけてみよう。

どうやら、吉外の足にナイフが刺さっているようだ。恐らくは、蹴りの軌道を予測して、普通に刺したのだろう。まあ、そうなるよな。

「痛い痛い痛い痛い痛い痛いよ？」

吉外は、足を抱えてのたうちまわる。そこに、札外が止めを刺そうとナイフを振りかざす。

「ざっ……、誰だ？」

止めを刺すのを中止し、後ろを振り返る札外。

そこには、白外が居た。

「貴様等っ！俺様が来たのだ。頭を下げろ！」

うわ、白外かよ。あいつ、俺達枠外にも喋りかけてくるし、うざいんだよな。見つかる前に帰るか。

全く、折角枠外の仕事に乗り気になりつつあったのに……、うわ。

「おい枠外、俺様は腹が減った。飯を用意しろ」

「いえ、私達は観察が役目なので、そういうことは出来ないです」

だから枠外に話しかけんなよ。毎度毎度、これだから白外は嫌なんだよ。

つーかさ、お前、後ろから札外が狙ってんぞ。ムカつくから言わねーけど。

「ふんっ、枠外とはつまらん奴だな。物語に介入しないで、何が……、楽しいんだ？」

相変わらず偉そうな態度をしつつ、札外の攻撃を防ぐ白外。もしかして、こいつ、最強なんじゃね？

まあ、今がチャンスだ！

「白外様、私は仕事がありますので、失礼します」

ダッシュ。これでも一応、若い頃は陸上で全国二位のスピードを誇っていたんだ。追いつけまい。つーか、追い掛けないだろうが。

……っと、よし、十分離れたな。ここからなら適度に観察出来る。

「おい……、貴様、誰に向かって武器を向けている。俺様は白外だぞ」

「……」

「無視か、ふざけおって！成敗してくれるわ！」

逆上した白外は、ついに攻撃に出た。まあ、さっきまで延々とナイフで刺されそうになってたんだから、誰だって怒るよな。端から見ても普通の流れだ。

バキッ、と。戦いは一瞬で終わった。札外のナイフが白外のメリケンに折られたのだ。

昔、戦国時代頃は、ほとんど全員が刀で戦っていたため、中々面白い戦いになっていたらしい。だが、最近は皆、変わった武器を使うようになったせいで、一瞬で決着がつくことが多くなった。

まあ、武器が折れたらおしまいだろうな。さらばだ、俺の未来の不倫相手候補。

「すったー、びーむ！」

突然、白外の後ろからスコップが飛んできた。

「貴様っ！こんなところにいたのか！今度こそ殺す！」

「ららららーん。ららた」

「待て！ゴミッ！」

スキップで逃げて行く吉外を、白外が追う。吉外の足の傷は、すでに完治しているようだ。やっぱあいつ、化け物だ。

とにかく、札外は生き残ったようだし、めでたしめでたし、だ。

「……ざっくり」

あ・・マジ・・・？

札外、殺害する（後書き）

登場枠外紹介

枠外　俊（しゅん）

相当な怠け者だったが、家族の為ならそこそこ頑張ることもあった。
変わった女の人が好きで、特に人殺しは最高だと言っていた。
大好物は、妻の作った野菜炒めだった。
浮気性で、妻以外の女に言い寄ることも多かったが、その相手は皆、すぐに刑務所行きになったため、一度も浮気に成功したことは無かった。
ちなみに、妻にプロポーズするときは、プラチナの刀をプレゼントした。

吉外をストーキング

ええ、主人が死んでしまいましたので、私が枠外をすることになりました。ふつつか者ですが、よろしくお願いします。

主人が死んだのは悲しいですが、記録によると、浮気する気満々だったみたいですし、自業自得ですよね。

とにかく、吉外さん。彼を観察してみることにします。武器を失った状態でどう戦うのか、見物です。

「ささにはささささ、たらこなし」

ふむ、どうやら、吉外さんは見えない人と会話しているようです。私には理解出来ませんが、何語でしょうか？

「はっけ、んだよー」

おお、どうやら何かを発見したようです。突然走り出しました。

「のか、のうか、なてとてた」

吉外さんが向かった先には、洞窟がありました。そこへ、歌いながら入っていきます。

しかし、よく見つけましたね。入口は木で覆われていて、過去の戦いでもここを発見した人は数える程しかいませんのに。

しばらく進むと、地面に焚火の跡が見つかりました。それも結構新しいものです。誰か、居るんでしょうか？

「やあ、吉外さん。おっひさー」

「お、ひさー？」

洞窟の奥から、一外さんが出てきました。

「あのさ、吉外。ここには、僕しかいないよ。決して武外さんが奥に隠れてたりなんてしてないから、戦うなら僕と戦おう」

「かね、ぶき、ない。ぶき、ない。戦えない」

「ふむ。なるほどね、それはいい。実はこの洞窟、奥から猛毒が出ててね。僕がここで猛毒を食い止めてるから、君は早く逃げるんだ！」

「わか、た」

猛毒が出ているのですか。それは私も知りませんでした。吉外さんも帰ることにしたらしいし、早く出ましょう。死にたくないですから。

それにしても、一外さんっていい人なんですね。吉外さんの為に猛毒を食い止めてくれるなんて。

「ちなみに、地盤沈下とかでこの洞窟は崩れそうだから、もうここには来ないでね！」

洞窟から出るとき、僅かに一外さんの声が聞こえてきました。最後まで他人を心配してくれるとは、まさに人間の鑑です。

「ぱるる、っととも、さかな！」

洞窟の近くの湖に、吉外さんは潜っていきました。

湖から出るとき、口に沢山の魚をくわえていました。なるほど、お食事ですね。

ザクッ！

おっと、お食事の途中で矢が飛んできました。そして見事に背中に的中です。

矢を撃った犯人は、札外さんのようです。というか、撃ったのではなく投げたっぽいですね。

「……ざっくり」

「ぶき、げっとー！」

吉外さんが背中の矢を抜くと同時に、札外さんが姿を現しました。

ふう……。

ひゃっほう！！殺害現場が見れるぜ！

枠外の家に嫁いでから、ずっと死体を見る機会がなくて、困ってたんだよなあ！

先に動いたのは札外、スコップで吉外の首を狙う。だが、吉外はそれを避けずに、手で受け止めた。真剣白刃取りって奴だ。

確かあれ、科学的には不可能な技だよな。すげえ、すげえよ吉外！

吉外は長いリーチを活かし、スコップを掴んだまま札外の腹に蹴りを入れる。

その衝撃で、札外は二メートル程吹き飛ばされる。

「ぐぎゃあああ」

だが、悲鳴をあげたのは吉外のほうだった。

「……ざっくり」

札外がニヤリと笑う。どうやら、腹の辺りに針を仕込んでいたらしい。吉外の足から大量に血が出る。

死ぬのか、死ぬんだな！あっはっはっはっは！死ね、死ねよおい！

「……この針、毒入り。致死量、数百倍」

「は。うわあはは！いやが！」

ナイス札外だ！毒とか、マジ最高だよ！天才、天才だ！

「みず、もぐる！」

吉外は湖に叫びながら潜っていった。水で毒を洗い流せるとでも思ってんのかよ。あはははははははははははははははは。

あはははははははははははは・・は・・・。

「……ざっくり」

おっと、刺されちゃいました。そういえば、主人によく言われてたんですよね。「お前が楽しそうにしてるところは可愛いが、周りが見えなくなりすぎるところは直した方がいい」って。

あれって、こんなことにならないように言ってたんですね。

まあ、おかげ・・・、家族達・・いけ・・。け・オ・・・。

吉外をストーキング（後書き）

登場枠外紹介

枠外　命（みこと）

元殺人狂で、現役の主婦だった。
普段は大人しい性格だが、テンションが上がると暴走してしまいがちだった。
得意料理は野菜炒めだった。
夫から貰ったプラチナの刀を愛用していて、料理にも使っていた。
そのため、子供達には侍母さんと呼ばれていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0124z/

外の支配者の命懸けのサバイバル

2011年12月1日19時47分発行